報道関係各位

2024年7月4日

京都女子大学 社会のための女子大学 教員ニュースレター

カズオ・イシグロや『はだしのゲン』の研究

文学部
英語文化コミュニケーション学科 教授 荘中（しょうなか） 孝之（たかゆき）

『はだしのゲン』はアメリカでどう受け入れられているか？ ゼミ生とともに被爆者の証言映像に英語字幕を付ける

コメントできる研究領域

- 英米・英語圏文学
- カズオ・イシグロ
- 『はだしのゲン』
- 被爆者証言

京都女子大学は、教員の研究活動や社会連携など“社会のための女子大学”の姿をお伝えするニュースレターを発信しています。今回は、英米・英語圏文学を専門とする、英語文化コミュニケーション学科の荘中孝之教授をご紹介します。

■ノーベル文学賞作家カズオ・イシグロの作品を多角的な視点から研究。

荘中教授は、日系英国人作家カズオ・イシグロと欧米諸国及び日本の文学、映画、音楽との関連などを研究しています。イシグロは青年期にシンガーソングライターを志し、多くの作詞をしています。荘中教授は、現在その歌詞の原稿や創作ノートから小説作品との関係を分析し、アメリカ音楽の影響という新たな視点からイシグロの文学を考察しています。

またイシグロは渡英する５歳まで暮らした戦後の長崎を、処女作『遠い山なみの光』の舞台にしています。そのことから長崎での幼少期の記憶が創作作品に影響を与えていると考えられますが、荘中教授は作家活動前の作詞にも、長崎への郷愁が見られると指摘します。

■英語版『はだしのゲン』がアメリカでどう受け入れられているかを調査。

中沢啓治氏の被爆体験を漫画にした『はだしのゲン』は、現在、世界24ヵ国の言語に翻訳されています。2019年にハワイの日系人社会を中心に現地調査を行った荘中教授によると、これまで作品を広めるために個人や団体によって図書館や学校などに寄贈されたりしたことはあるものの、その中に見られる暴力的な表現や男性中心的な価値観、政治的な問題、そしてアメリカ人の罪悪感を引き起こすことなどがネックとなり、日本で考えられているほどアメリカでは受け入れられていないということです。

荘中教授は、強く平和を希求するこの作品の本質的な部分を理解し、それを広めようとした人々の苦労と、アメリカで受け入れられにくい理由を知ることは、唯一の被爆国に生きる現代の我々にとって、戦争や原爆の悲惨さをどのように世界に発信し、伝えていくべきかのヒントになると考えています。

■国立広島原爆死没者追悼平和祈念館と協働で、ゼミ生が中心になって被爆者の証言映像に英語字幕を付ける。

荘中ゼミでは３回生の後期に、30分ほどの被爆者証言映像に英語字幕を付ける取り組みを、いくつかのグループに分かれて行っています。今年の映像は、20歳のとき妊娠中に広島で被爆された小髙美代子さんの証言です。後遺症に苦しみながらも、原爆症集団認定訴訟の原告団長となった方です。翻訳の作業は日本語特有の曖昧な表現や、被爆者の方の心情を理解しながら慎重に進める必要があり、学生が英訳したものを荘中教授がネイティブスピーカーや平和祈念館と調整を重ねて完成させています。被爆者の証言を世界に広める活動を行っているNET-GTASという団体とともに、荘中教授は2014年からこの取り組みを続けています。英語字幕を付けた証言映像は、平和祈念館のホームページで公開されています。

荘中孝之（しょうなか・たかゆき） Profile

https://gyouseki-db.kyoto-wu.ac.jp/kywuhp/KgApp/k03/resid/S001773

略歴　1968年兵庫県生まれ。1999年　バーミンガム大学大学院修士課程修了（M.Phil）。2009年　大阪大学大学院文学研究科博士課程修了（博士）。京都外国語短期大学キャリア英語科教授等を経て、2020年4月より現職。

論文　「海を渡る『はだしのゲン』―その英語訳とハワイにおける受容」
（単著／2022年／京都女子大学大学院文学研究科紀要）

著書　*Japanese Perspectives on Kazuo Ishiguro*（共編著／2024年／ Palgrave Macmillan）
『カズオ・イシグロと日本―幽霊から戦争責任まで』（共著／2020年／水声社）
『カズオ・イシグロの視線―記憶・想像・郷愁』（共編著／2018年／作品社）

＜本件に関する報道関係者の皆様からのお問合せ先＞
・京都女子大学入試広報課　岡橋・竹縄　℡：075－531－7054　FAX：075－531－7222
・京都女子大学広報デスク（ﾌﾟﾗﾝﾆﾝｸﾞ・ﾎﾞｰﾄ内）福嶋・井上　℡：06－4391－7156　FAX：06－4393－8216
・京都女子大学ＨＰ　https://www.kyoto-wu.ac.jp